『古代アメリカ』 9, 2006 pp. 1-23

＜論文＞

日本におけるマヤ・イメージの消費構造
ー高校生・大学生・放送大学生に対するアンケート調査からの一考察ー

吉田栄人
（東北大学大学院国際文化研究科）

【要旨】

本稿では、高校生・大学生・放送大学生を対象としたマヤ・イメージに関するアンケート調査の結果を用いて、日本で流通するマヤ・イメージはどのようなものなのか、またそれはどのようなプロセスによって再生産されているのかを明らかにする。特に本稿では、マヤに関する情報へのアクセスないしは無意識のうちのそれへの被曝という観点から、これらの 3 つの標本集団をマヤ・イメージの獲得あるいは形成の時系列において考察する。

この分析によって、学校における世界史の教育を通してマヤとインカとが混在したマヤ・イメージが形成されていくこと、また、世界史の教育を受けていない場合であっても、テレビ番組などを介してそうしたマヤ＝インカ複合としてのマヤ・イメージを獲得する傾向にあること、さらには、そうしたイメージはハビトゥスとして機能しているため、マヤに関する正確な情報を入手した場合でも、マヤとインカを混同する傾向は減らないことが明らかになった。

【キーワード】

マヤ、オリエンタリズム、イメージ、消費、ハビトゥス

Maya, orientalism, images, consumption, habitus

【目次】

はじめに
1　アンケート調査の内容と対象
2　集計結果
2.1　「マヤ」に関する情報源
2.2　「マヤ」地域の識別度
2.3　図像イメージに関するマヤ識別度
2.4　「マヤ」に関する観念的イメージ

3　考察
おわりに

はじめに

今日日本において流通するマヤ・イメージあるいはマヤ文明観はマスメディア等の商業主義によって少なからず本来のあるべき姿からは歪められたものになっている。日本のマヤ研究者のほとんどはそうした苛立ちを少なからず感じているはずである。そもそもマヤに関する情報はマヤ考古学という西洋の植民地支配とその社会的経済的関係性（「西洋」に暮らす人々の欲求をも含む）の下に成立した学問によって広まってきたものである以上、それはオリエンタリズム的思考が鮮明に刻印された西洋による一つの異文化表象である[青山 2001; ボーデ 1991; Castañeda 1996; Evans 2004; サブロフ 1998]。その意味においてマヤに関する情報はオリエンタリズム的思考によって常に「歪められ」て来たと言える。青山は、日本でもマヤに関する情報が「歪められて」流通する状況に対して、「『マヤ・オリエンタリズム』が一部の非良心的なマスメディアによって創出あるいは捏造され続けており、誇大化されている」[2001: 21]として、怒りの矛先を経済的利益のためにマヤを利用するマスメディア（ジャーナリズム）に向けている。しかし、青山も示唆する通り、そうした「歪められた」マヤ言説は西洋の学問対象としての「マヤ」が日本に輸入され単に資本主義原理に基づいて消費されているだけでなく、現代の日本社会が求めているものでもある。日本が西洋の一部であるとみなすならば、日本においてマヤ・オリエンタリズムが再生産されるのは当然のことである。だが、果たしてそうした理解だけでいいのだろうか。日本におけるオリエンタリズム的消費を批判するのであれば、むしろ日本でマヤ・オリエンタリズムが再生産（消費）される事情をもう少し詳細に検討してみる必要があるだろう。すなわち、マヤに関する日本のオリエンタリズムとはいかなるものなのかを明らかにしなければならない。少なくとも、日本において流通する「マヤ」イメージないしは言説を再生産し続ける、マスメディアと日本社会に潜む欲望との関係を明らかにしておく必要があるだろう。

日本におけるマヤ・オリエンタリズムを理解するためには、ただ単に専門書や雑誌、テレビ番組、コンピュータ・ゲーム、博物館展示など現在日本で消費される「マヤ」情報（マヤに関するものだけでなく、マヤに関連するとみなされるものも含む）の流通の形態を理解するだけでなく、そうした情報に対するニーズがどのように形成されてきたのかその歴史的背景にまで踏み込む必要があるだろう。だが、その全貌を本稿の限られたスペースで取り上げることは到底できない。本稿ではその一端を明らかにする作業として、筆者らが 2002 年と 2003 年に高校生および大学生を対象に実施したマヤ・イメージに関するアンケート調査データの分析を通じて、今日日本で消費されるマヤ言説はどのようなもので、またそれはどのようにして再生産されているのかを考えてみたい[1)]。

1. アンケート調査の内容と対象

日本社会におけるマヤ・イメージ（言説）を理解しようとする上で、高校生と大学生だけを調

査の対象としていては、分析可能な範囲ないしは項目は自ずと限定されてしまう。しかし、日本人の多くは学校教育を通じてマヤに関する情報を得ることが多い実情を考えれば、学校教育、特にマヤに関しての記述が登場する高校の世界史教育を境にして[2)]、集合的なある種のマヤ・イメージが形成されていく。その意味では、世界史教育からまだ大きな影響を受けていない高校生とその影響をより多く受けてしまった層との比較を通じて、日本におけるマヤ・イメージの形成あるいは消費の原初的形態を明らかにすることができると考えられる。

しかし一方で、マヤに関する情報はテレビ番組など学校教育以外の場でも少なからず流通している。そこで本稿では、「マヤ」情報との接触（必ずしも自ら望んだものではない無意識的かつ半強制的な側面を重視して、本稿では以後マヤ・オリエンタリズムからの被曝と呼ぶ）の度合いという観点から[3)]、回収したアンケートを高校生、大学生、放送大学生という 3 つのグループに分けた。その上でこれらの母集団間でマヤ・イメージがどのように変化するかを検討した。

今回の調査で対象とした「高校生」は基本的にはアンケート実施の時点でまだマヤに関する世界史教育を受けていない 1 年生と 2 年生である。したがって、彼らが何らかのマヤ・イメージを持っているとすれば、それは学校教育以外のメディアを通じて形成されたものであると言える。また、学校教育以外のマヤ情報に被曝した量も大学生や放送大学生に比べれば依然少ないはずである。一方、「大学生」は、世界史教育を受けた（もちろん全員ではない）集団であるが、彼らは同時に、学校教育以外のマヤ情報に被曝した可能性が高校生よりも高い集団である。実際、アンケート調査の結果もこの仮定を支持するものである。教科書にマヤに関する記述があったと答えた者は高校生が 12.7%だったのに対し、大学生は 45.9%である。また、授業以外のメディアでマヤに関する情報を得たと答えた者は高校生が 35.1%であるのに対し、大学生は 60.1%だった。他方、放送大学生を通常の大学生から区別しているのは、彼らは筆者が 2003 年度に放送大学で行なった面接授業「中米先住民マヤの人類学」（千葉学習センター）の受講者だからである。つまり、本稿で扱う「放送大学生」はマヤに関しては通常の大学生あるいは普通の日本人よりはるかに高い関心と知識を持った母集団であると考えられる。しかも、彼らの年齢が通常の大学生よりはるかに高いことを考慮すれば、彼らがマヤ・オリエンタリズムに被曝した量はかなり高いと予想される。実際、「放送大学生」のうち教科書にマヤに関する記述があったと答えた者は 26.3%であったのに対し、80.0%もの人が学校以外のメディアからマヤに関する情報を入手したと答えている（以上、表 1 参照）。

これら 3 つの集団がそれぞれどのようなマヤ・イメージを持っているかを確認するため、アンケートでは、設問 1（教科書にマヤに関する記載があったか否か）と設問 2（授業でマヤに関する解説があったか否か）において高校までの授業においてマヤに関する教育を受けたか否か、また設問 3（学校教育以外からマヤに関する情報を得たか否か）および設問 4（学校教育以外のどのようなメディアからマヤに関する情報を得たか）において学校の教育以外でマヤに関する情報を得たことがあるか否かをまず尋ねた。これらの設問により、学校教育の有無あるいは学校教育以外のメディアの有無と、設問 6 以降から得られるマヤ・イメージとの相関関係が得られる。すなわち、両者の差分に、学校教育およびその他のメディアがマヤ・イメージの形成に与える影響を読み取ることが可能になる。

具体的なマヤ・イメージに関する設問事項は、地理的イメージ（設問 6 と設問 7）、観念的イメージ（設問 8）、図像イメージ（設問 9）の三つである。設問 6 において「マヤ」がどの地理的情報

と結びつけられているかを地名から確認した。ただ、地名は必ずしも正確な地理的情報と記憶されているわけでないので、設問7において「マヤ」を地図上にマッピングしてもらった。設問8では「マヤ」という言葉を聞いて何を想起するか自由に記述してもらった。これは「マヤ」が意識レベルにおいてどのようなものとして分類されているのか、またそれはどのようなコンテクストにおいて引用されるのかを探るためのものである。最後に設問 9 では、12 枚の写真を並べ、それらがマヤに関するものであるか否かを答えてもらった[4)]。

2. 集計結果

2.1 「マヤ」に関する情報源

設問 1 から設問 3 までの質問に対する回答結果は表 1 の通りであった。マヤに関する情報を学校の歴史教科書や授業よりも、その他のメディアから得たと答えた者がいずれの標本集団においても多いことは、日本におけるマヤ・イメージの形成に学校教育以外のメディアが果たしている役割の大きさを示すものである。しかし、高校生と大学生を比較した場合、学校教育を通じてマヤに関する情報を得ている比率が教科書ベースで 12.7%から 45.9%にまで一気に拡大しており、マヤ・イメージの形成に学校教育は一定の役割を果たしていると言えよう。

学校教育以外のメディアにおいて最も多かったのはいずれのグループにおいてもテレビ番組であり、他のメディアを圧倒している。しかも、テレビで「マヤ」に関する番組を見たと答えた高校生が約 3 割に留まっているのに対し、大学生では半数に達している。このことはテレビを見る機会（累積量）が増えると、その分だけ「マヤ」に関する情報に触れる機会が多いことを示している。

テレビ番組でマヤに関する情報を得たと答えた 1,039 人の内 393 人(37.8%)が TBS 系列放送の「世界ふしぎ発見！」を具体例として挙げている。他には NHK の何かの番組とする者が 134 人、TBS 系列放送「世界遺産」を挙げた者が 44 人、同「世界ウルルン滞在記」が 20 人いた。「世界ふしぎ発見！」（毎週土曜日夜 9 時）は 1986 年 4 月に始まった番組である。この番組では 2004 年末までに 8 回もマヤ文明を取り上げている。その他にラテンアメリカの古代文明に関する放送がいく

表 1　マヤに関する情報源

単位：人数（標本に対する百分率）

学校教育の有無	高校生	大学生	放送大学生
（標本全体）	727	1,470	80
教科書記述あり	92(12.7)	675(45.9)	21(26.3)
教科書記述なし&覚えていない	635(87.3)	795(54.1)	59(73.7)
授業説明あり	118(16.2)	400(27.2)	7(8.8)
授業説明なし&覚えていない	609(83.8)	1,070(72.8)	73(91.2)
授業以外見聞きあり	255(35.1)	884(60.1)	64(80.0)
授業以外見聞なし	472(64.9)	586(39.9)	16(20.0)

表 2　マヤに関する情報源（学校教育以外のメディア内訳）

単位：人数（標本に対する百分率）

媒体	高校生	大学生	放送大学生
（標本全体）	727	1,470	80
テレビ	211(29.0)	755(51.4)	55(68.8)
漫画	53(7.3)	169(11.5)	3(3.8)
雑誌	20(2.8)	99(6.7)	11(13.8)
専門書	32(4.4)	157(10.7)	21(26.3)
ゲーム	10(1.4)	33(2.2)	1(1.3)
映画	18(2.5)	49(3.3)	5(6.3)
その他	32(4.4)	99(6.7)	19(23.8)

つもあり、その中でもマヤに関して言及された可能性がある。また、後述するが、マヤ文明を南米のアンデス文明と一括りでとらえているケースが多々ある。そうした人たちにとっては、ラテンアメリカの古代文明を扱った放送分もマヤ文明に関する情報源となっているはずである。

テレビ番組以外のメディアでマヤの情報源としてあげられたものには次のようなものがあった。漫画では『スプリガン』(29 人)、『三つ目がとおる』(14 人)、『ドラエモン』(7 人)、『シャーマンキング』(4 人)、雑誌では『ニュートン』(12 人)、『ムー』(6 人)、『世界遺産』(9 人)、『ナショナルジオグラフィック』(5 人)、コンピュータゲームでは『太陽の神殿』(4 人)、『ガイア幻想紀』(3 人)、専門書では『神々の指紋』(13 人) などが主たるものだった。また、その他の項目に関しては博物館等の展示を挙げるものが 21 人いた。

しかし、これらのメディアは個人の趣味に依存するところが大きく、そもそも比較の対象にならない。むしろ、それらのメディアで見聞きしたものがマヤに関するものであったとみなしている者がいることが確認されたことの方が重要だろう。すなわち、アンケート回答者が「マヤ」に関する情報だと思ったものが、実際にマヤに関するものであったかどうかは実のところ定かではない。たとえば、映画でマヤに関するものを見聞きしたと回答した者が 72 名(3.2%)あったが、日本でマヤに関する映画が放映されたことはおそらくないはずである。実際、調査用紙に記載された映画タイトルは「インディー・ジョーンズ」(6 件)、「ハムナプトラ」(2 件)などであった。いずれも古代文明の遺跡が舞台となっている点で、明らかに古代マヤ文明と勘違いしたものである。これは、おそらくテレビ番組に関しても同様のことが言える。つまり、アンケート回答者が「マヤに関する情報をどこから得たか」と尋ねられたときに提示するものには、彼らが「マヤ」に関して持っているイメージと合致した、マヤではないものも十分に含まれうる。したがって、ここでいうところのマヤに関する情報源は、日本において流通するマヤに関する映像や叙述であると同時に、日本人が「マヤ」に関して抱くイメージに限りなく類似したものを含んでいることを理解しておかねばならない。

特に、コミックスやコンピュータゲームが作り出すストーリーがフィクションであることは分かっていても、その舞台背景となっているマヤ文明に関する語りのどこまでが真実でどこからがフィクションであるのかは、マヤに関する知識を事前に持っていない限り分からない。たとえば、

『スプリガン』（少年サンデーコミックス、小学館 1991 年）は超古代文明が残した不思議な“力”を封印しようとする特殊工作員（スプリガン）の物語である。「仮面伝説の章」では翡翠の仮面と化したケツアルクアトル[*sic*]とテスカトリポカの戦いがテオティワカンやパレンケ、ウシュマル、チチェン・イツァなどの遺跡を舞台として展開する。遺跡などのイラストは確かにマヤの遺跡を描写したものである。しかし、マヤに関する情報を持たない者が、漫画の中のどれがマヤであるかを知ることはおそらくほとんど不可能である。そもそも『スプリガン』ではケツアルクアトルとテスカトリポカがマヤの神ではないという説明はない。むしろ、マヤ文明の地であるパレンケ遺跡で発見された翡翠の仮面はケツアルクアトルの生まれ変わりであるという設定になっている。しかも、そのケツアルクアトルの先祖がもたらした技術によって中南米一帯の文明、インカ、オルメカ、アステカ、マヤなどができたこととなっている。つまり、『スプリガン』はマヤを特定するための情報を提供するどころか、むしろ逆に中南米に栄えた文明の一つとして、他の中南米文明との差異を消し去っている。マヤは中南米文明が栄えた一つの地域として設定されているのである。

これらが提示するフィクションをマヤに関する情報源とみなしてしまうことは多々あるはずである。少なくとも、マヤに関する語りに遭遇した際、そこから得た情報ないしはイメージが動員され、知識およびイメージの再交渉が行なわれるはずである。フィクションとしてのマヤの語りには確かに間違った情報が含まれている。しかし、実際にマヤの人々との間に社会的（道義的）な関係を持たない人にとって、その情報が間違ったものであるか否かはさしたる問題ではない。異文化としてのマヤはそれを消費する個人の思考＝嗜好を満足させるものでしかないからである。その意味で教科書や専門書が提供するマヤに関する情報とコミックスやコンピュータゲームの語りに登場するマヤとの間に大きな差はないと言える。それらの情報は、仮に学術的な内容のものであっても、消費者とマヤとの関係を規定してしまうほどの重みを持って受け止められている場合はほとんどないだろう。むしろ、そうした情報を通じてマヤという存在に気づかされ、マヤについてもっと知りたいという興味を抱くきっかけとして作用していると考えるべきだ。

2.2 「マヤ」地域の識別度

アンケートの設問 6 でマヤ文化ないしは文明と関連する国もしくは地域の地名を選ばせた。その結果を高校生・大学生・放送大学生毎に集計したものが表 3、またそれをグラフ化したものが図 1 である。アンケート用紙では地名はアットランダムに並べていたが、分析にあたってここでは地理的にマヤ地域に近い地名をX軸の左側に集めている。

マヤ地域の同定率は母集団によってかなりの偏差が見られる。しかも、それが最も顕著に表われる「メキシコ」に関しては、高校生(29.8%)、大学生(48.2%)、放送大学生(73.8%)の順に高くなっていく。これは単なる関心度の違いによるものではなく、むしろマヤに関して保持する情報量ないしは知識の差に由来するものであると考えられる。たとえば、高校生はペルーをマヤ地域と答えた者が 40%と多少高い割合を示した以外、その他の地域に関してはほとんどが 20%台である。これは今回アンケート調査を実施した高校生がマヤに関しての歴史教育を受けていないため、マヤ地域がほとんど特定できないことを示すものだ。一方、大学生になると（すなわち世界史の教育を受けた後では）マヤ地域の同定率が上がり、同時に旧大陸文明がマヤ文明とは関係ないことがはっきりと示せるようになっており、学校の歴史教育がマヤ地域の識別に一定の役割を果たしていることが伺

表 3　マヤと関連するとみなされた地名

単位：人数（標本に対する百分率）

地名	高校	大学生	放送大学生
（標本全体）	727	1,470	80
メキシコ	217(29.8)	708(48.2)	59(73.8)
グアテマラ	184(25.3)	373(25.4)	45(56.3)
メソアメリカ	156(21.5)	341(23.2)	18(22.5)
カリブ海	140(19.3)	197(13.4)	16(20.0)
ジャマイカ	157(21.6)	130(8.8)	10(12.5)
アンデス	215(29.6)	420(28.6)	25(31.3)
ペルー	291(40.0)	668(45.4)	36(45.0)
エル・ドラド	189(26.0)	207(14.1)	18(22.5)
アマゾン河	211(29.0)	189(12.9)	14(17.5)
ブラジル	162(22.3)	221(15.0)	17(21.3)
アフリカ	152(20.9)	71(4.8)	4(5.0)
インダス	161(22.1)	122(8.3)	2(2.5)
メソポタミア	170(23.4)	132(9.0)	3(3.8)
エジプト	161(22.1)	107(7.3)	3(3.8)

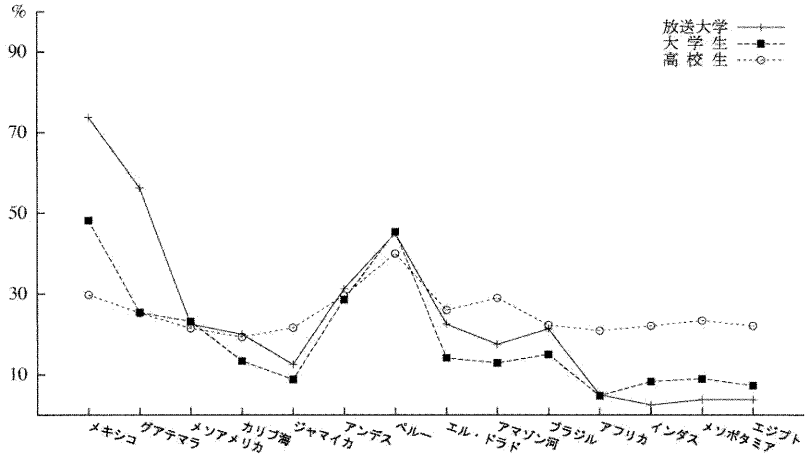


図 1 マヤと関連するとみなされた地名

える。また、マヤに強い関心があり、学校教育以外のメディアからもマヤに関する情報を積極的に得ていると思われる放送大学生のマヤ地域の同定率が高いことは、地名に関する限りマヤの識別は明らかに情報量に依存するものであることを示している。実際、学校教育がマヤ地域の同定率に与える影響は、地名の識別度と、設問 1 および 2 で得られたデータとの相関関係からも確認することができる（表 4)。また、図 2～4 はこの情報源別のマヤ地域識別度を各標本毎にグラフ化したもの

であるが、これらは獲得した情報量によってマヤ識別度が大きく変わることを明確に示している。つまり、高校生ではアンデス地域とアマゾン地域を除く他の地域のマヤ識別度は 30%を挟んでほぼ一定であるのに対し、教育やその他のメディアを通じてマヤ情報を得る機会の増える大学生や放送大学生では、メキシコやグアテマラなどのマヤ地域同定率が上がり、他方で旧大陸文明をマヤ地域と誤認する割合が低下するのである。

2.3 図像イメージに関するマヤ識別度

アンケートの設問 9 で示した図像をマヤのものであるとみなした者は表 5 の通りである。また、図 1 の場合と同様に、これらの図像をマヤ地域との地理的な距離によって配置・グラフ化したのが図 5 である。マヤ地域に関するもの(01,05,07,09,11)では高校生と大学生との間に有意な差異は見られない。これは図像情報は教育によってあまり左右されるものではないことを示すものだろう。むしろ、放送大学生のマヤ同定率が極めて高いことに示されるように、図像イメージとマヤ情報との結合は関心の度合いによるところが大きいと考えられる。11 番のサパティスタがすべての標本集団において一定して 10%程度に留まっているのは、日本社会にそもそもサパティスタに関する情報がほとんど流通していないことによるものだろう。また、仮にサパティスタ関連情報に遭遇したとしても、それをマヤとの連関で捉える情報処理の枠組みを持たないことを意味するはずである。いずれにせよ、この数値は、日本に流通する「マヤ」という情報が古代文明に関連するものでしかないことを示唆している。

表 4　情報源別マヤ地域識別度

単位：人数（該当数に対する百分率）

地名	教科書あり	教科書なし	授業あり	授業なし	他あり	他なし
(該当数)	801	1,508	535	1,774	1,222	1,087
メキシコ	473(59.0)	528(35.0)	304(56.8)	697(39.3)	702(57.4)	299(24.8)
グアテマラ	236(29.5)	371(24.6)	161(30.1)	446(25.1)	390(31.9)	217(20.0)
メソアメリカ	227(28.3)	294(19.5)	153(28.6)	368(20.7)	344(28.2)	177(16.3)
カリブ海	149(18.6)	209(13.9)	104(19.4)	254(14.3)	203(16.6)	155(14.3)
ジャマイカ	79(9.8)	221(14.7)	49(9.2)	251(14.1)	146(11.9)	154(14.2)
アンデス	272(34.0)	397(26.3)	176(32.9)	493(27.8)	465(38.1)	204(18.8)
ペルー	443(55.3)	568(37.7)	301(56.3)	710(40.0)	667(54.6)	344(31.6)
エル・ドラド	144(18.0)	273(18.1)	94(17.6)	323(18.2)	242(19.8)	175(16.1)
アマゾン河	124(15.9)	290(19.2)	90(16.8)	324(18.3)	222(18.2)	192(17.7)
ブラジル	138(17.2)	265(17.6)	102(19.1)	301(17.0)	246(20.1)	157(14.4)
アフリカ	53(6.6)	175(11.6)	47(8.8)	181(10.2)	90(7.4)	138(12.7)
インダス	75(9.4)	210(13.9)	61(11.4)	224(12.6)	138(11.3)	147(13.5)
メソポタミア	84(10.5)	222(14.7)	68(12.7)	238(13.4)	141(11.5)	165(15.2)
エジプト	67(8.4)	206(13.7)	54(10.1)	219(12.3)	115(9.4)	158(14.8)

(「教科書なし」「授業なし」は「覚えていない」と答えた者を含む)

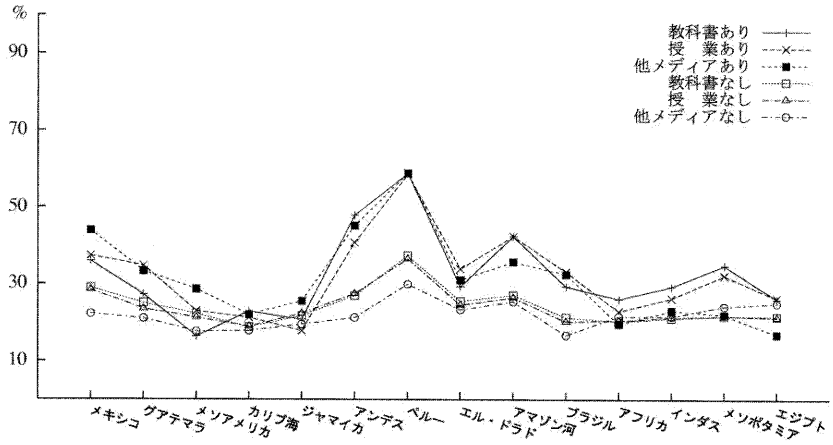


図 2　情報源別マヤ地域識別度（高校生）

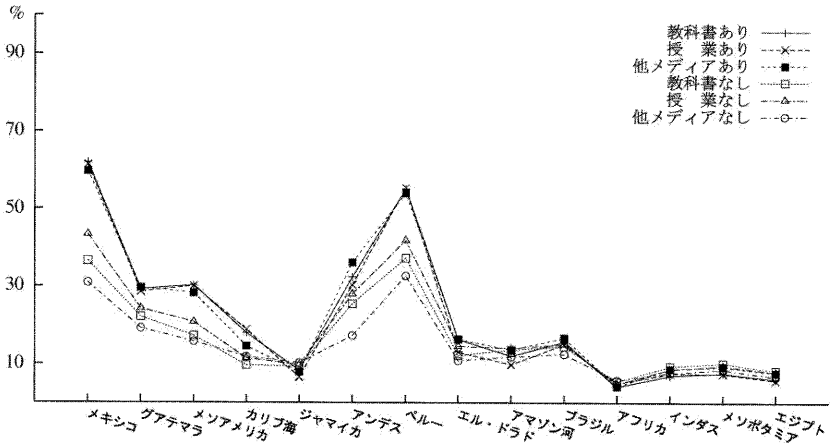


図 3　情報源別マヤ地域識別度（大学生）

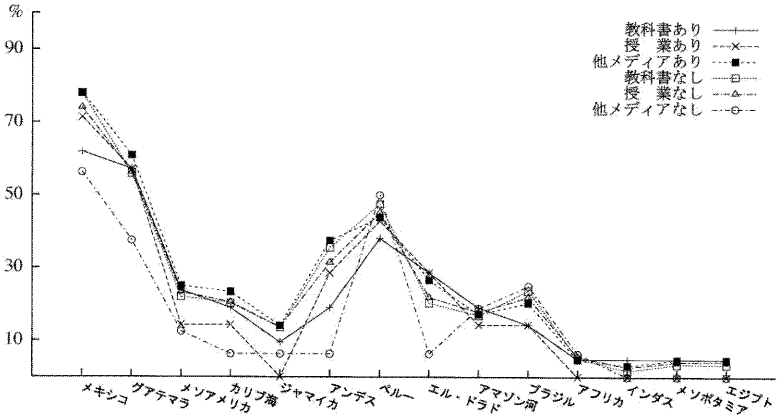


図 4　情報源別マヤ地域識別度（放送大学生）

なお、設問では写真の下に、それが何の写真であるか分かる場合には、地名もしくはものの名前を記入してもらうようにした。記入があった地名もしくは名称のうち主なものは表 6 の通りである。しかし、何の写真であるかが分かっていても、それがマヤのものなのかどうか分かっているとは限らない。たとえば、02 番がピラミッドだと答えた 541 名中約 13%(70 名)、04 番がイースター島のモアイ像だと分かる人 660 名中約 12%(79 名)、10 番でエジプトと答えた 216 名中約 3%(6 名)が、マヤか非マヤかという選択肢においてはマヤに○を付けている。03 番のマチュピチュ遺跡の写真に至っては、それがマチュピチュだと分かっている 215 名であっても、約 54%(116 名)はマヤに○を付けているのである。また、06 番のナスカの地上絵でもナスカと答えた 345 人の約 32%(109 名)がそれはマヤだと答えている。

表 5　図像のマヤ識別度

単位：人数（標本に対する百分率）

写真	高校生	大学生	放送大学生
(標本全体)	727	587	80
01 ティカル遺跡	314(43.2)	262(44.6)	58(72.5)
02 エジプト・ピラミッド	93(12.8)	34(5.8)	3(3.8)
03 マチュピチュ遺跡	256(35.2)	263(44.8)	37(46.3)
04 イースター島モアイ像	85(11.7)	59(10.1)	9(11.3)
05 テオティワカン遺跡	253(34.8)	224(38.2)	50(62.5)
06 ナスカの地上絵	192(26.4)	210(35.8)	29(36.3)
07 パレンケの仮面	236(32.5)	216(36.8)	43(53.8)
08 インドネシア影絵	206(28.3)	150(25.6)	32(40.0)
09 マヤ文字	255(35.1)	227(38.7)	49(61.3)
10 古代エジプト王妃	142(19.5)	89(15.2)	8(10.0)
11 サパティスタ	63(8.7)	66(11.2)	7(8.8)
12 南米先住民	285(39.2)	204(34.8)	23(28.8)

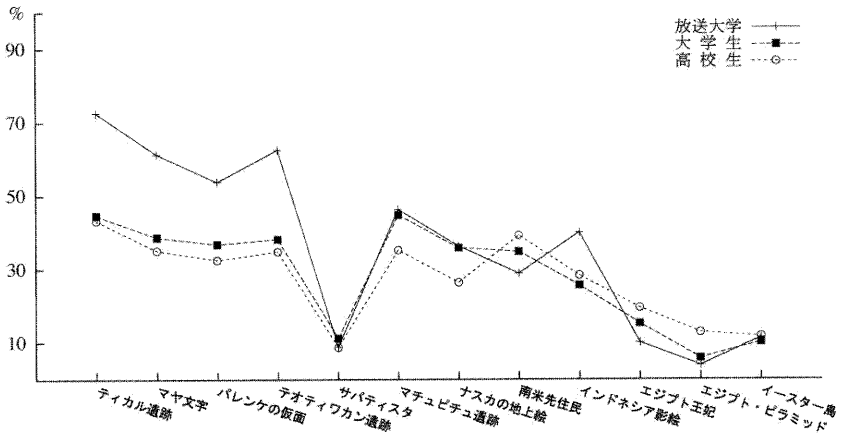


図 5　図像のマヤ識別度

表 6 写真の地名・名称記入例

写真	正答および近似例	その他の主要記入例
ティカル遺跡	ティカル遺跡 1、マヤもしくはマヤの神殿（ピラミッド）19	ボロブドゥール 9、アンコールワット 62 など
エジプト・ピラミッド	ピラミッド 541、エジプト 211	メソポタミア 2 など
マチュピチュ遺跡	マチュピチュ遺跡 215、インカ（文明・帝国) 83、アンデス 19	
モアイ像	モアイ像 613、イースター島 47	モヘンジョダロ 9、万里の長城 6、インダス文明 5、アステカ（文明） 6、マヤ（文明） 5 など
テオティワカン遺跡	テオティワカン遺跡 4、アステカ（文明）9、太陽の神殿（ピラミッド）11 名	モヘンジョダロ遺跡 16、インダス文明 10 など
ナスカの地上絵	ナスカ（地上絵） 345、地上絵 45、インカ 11	アステカ 11、ミステリーサークル 12、エジプト 4、マヤ 2 など
パレンケの仮面	ヒスイの仮面 14、パレンケ 2	インカ 5、ツタンカーメン 4、ナスカ 3、アステカ 2 など
インドネシア影絵	インドネシアもしくはタイの影絵 10、アジアの地名 約 40 名	エジプト 8、マヤ 3 など
マヤ文字	マヤ文字（マヤ文明） 25	象形文字 9 名、メソポタミア 10 名など
古代エジプト王妃	エジプト（文明） 216、クレオパトラ 22、ツタンカーメン 11、ファラオ 8	メソポタミア（文明） 4、マヤ 2 など
サパティスタ	サパティスタ 1、マルコス司令官 1	イスラム 30、ベドウィン 2、アルカイダ 8、タリバン 2、テロリスト 15 名など
南米先住民	アマゾンの先住民 5、インディオ 4	マヤ（人・族・民族・文明） 15、インディアン 7、マサイ族 11、アボリジニー 6、アフリカ 7

表 7 図像の情報源別マヤ識別度

単位：人数（該当数に対する百分率）

写真	教科書あり	教科書なし	授業あり	授業なし	他あり	他なし
（該当数）	377	1,025	281	1,121	667	735
ティカル遺跡	190(50.4)	445(43.4)	146(52.0)	489(43.6)	370(55.5)	265(36.1)
マヤ文字	173(45.9)	357(34.8)	129(45.9)	401(35.8)	314(47.1)	216(29.4)
パレンケの仮面	148(39.3)	348(34.0)	103(36.7)	393(35.1)	287(43.0)	209(28.4)
テオティワカン遺跡	166(44.0)	363(35.4)	119(42.3)	410(36.6)	314(47.1)	215(29.3)
サパティスタ	42(11.1)	94(9.2)	23(8.2)	113(10.1)	67(10.0)	69(9.4)
マチュピチュ遺跡	174(46.2)	386(37.7)	122(43.4)	438(39.1)	331(49.6)	229(31.2)
ナスカの地上絵	123(32.6)	310(30.2)	93(33.1)	340(30.3)	240(36.0)	193(26.3)
南米先住民	151(40.1)	364(35.5)	112(39.9)	403(36.0)	266(39.9)	249(33.9)
インドネシア影絵	112(29.7)	277(27.0)	87(31.0)	302(26.9)	204(30.6)	185(25.2)
古代エジプト王妃	47(12.5)	192(18.7)	40(14.2)	199(17.8)	99(14.8)	140(19.0)
エジプト・ピラミッド	29(7.7)	102(10.0)	27(9.6)	104(9.3)	41(6.1)	90(12.2)
モアイ像	37(9.8)	116(11.3)	29(10.3)	124(11.1)	63(9.4)	90(12.2)

（「教科書なし」「授業なし」は「覚えていない」と答えた者を含む）

図像のマヤ同定率を学校教育やテレビなどマヤ情報へのアクセスの有無との相関関係から見た場合の数値は表 7 の通りであった。情報の有無によって識別度に大きな開きを生むのがテレビなど学校教育以外のメディアである点など地名の場合と結果はほぼ同じである。ただ、地名の場合は 1 対 1 の対応による知識として処理可能であるので、情報量が増えることによって間違いは修正されやすい。しかし、図像を通じたマヤ・イメージは 1 対多の対応関係によって構築された情報群であるため、間違いがあっても修正は困難である。むしろ、情報の連鎖の内に新たな間違いが誘発される可能性さえ潜んでいる。インドネシアの影絵に関する放送大学生の見間違いはそうした情報の誤った連鎖に起因するものだと言えよう。

2.4 「マヤ」に関する観念的イメージ

アンケートの設問 8 ではマヤ文化・文明と聞いて思い浮かべるものを自由に記述させた。全アンケート数 2,309 件のうち、およそ 1,100 件に何らかの記述があった。その記述の主たるものを類似するカテゴリー別にまとめたのが表 8 である。

これらの記述例で最も多かったのはピラミッド(192 件)である。神殿(38 件)もこのピラミッドに加えることができるだろう。その他の多い記述例には遺跡(142 件)、マチュピチュ(100 件)、古の字を含むもの(111 件)、太陽(83 件)、文字(80 件)、石の字を含むもの(76 件)、インカ(69 件)、山の字を含むもの(66 件)、金の字を含むもの(54 件)、アステカ(49 件)などがある。これらの記述例は古代文明を核としてそこからイメージされる様々な特徴が引き出されていったことを示している。地理的な広がりに関しては中米、アンデス地域に集中しがちであるが、文化的および自然条件においては「秘境」と思われる場所への広がりを見せている。ただし、自然環境においては「砂漠」(11 件)よ

表 8 マヤと聞いて思い浮かべるもの

カテゴリー	記述例
古代文明関連	古代文明、アステカ（—文明）、インカ（—帝国、—文明）、テオティワカン、テノティティトラン、オルメカ、ナスカ（—の地上絵）、マチュピチュ（天空都市、空中都市）、エジプト、モアイ像、インダス文明、アンコールワット、世界遺産
古代文明の特徴	遺跡（石碑、墓）、ピラミッド（神殿、階段、段）、文字（マヤ文字、絵文字、無文字、縄文字、キープ、結び目、象形文字、記号）、とうもろこし（じゃがいも）、リャマ（アルパカ、ラクダ、ジャガー）、いけにえ（カニバリズム）、ミイラ、黄金（金、金銀、宝物、ダイアモンド、秘宝）、呪術（儀式、ぎしき）、神殿（建造物、宮殿、祭壇）、水晶ドクロ（仮面）、数字、青銅器（鉄）、石（石造り）、像（土偶、石像、仮面）、太陽（太陽神、太陽時計、太陽のピラミッド、太陽の神殿）、戦、天文学、都市、壁画（絵）、暦（カレンダー、太陽暦）、滅亡（滅びた、征服、消滅、失われた）、スペイン（ピサロ）、トーテムポール
地名	アフリカ（南アフリカ）、中南米（南米、南アメリカ）、中米（中央アメリカ）、メキシコ、ユカタン、アンデス（山脈、高原）、アマゾン、外国
異民族	先住民（先住民族、インディオ、原住民）、黒人（黒色、黒い顔）、顔（身、肌、裸）、民族、民族衣装（装飾）、原始的（原人）
環境	自然、砂漠、未開発、密林（ジャングル、森林、森、埋もれた）、山（山頂、山地、山岳、山脈、高山）
評価	謎、秘境、不思議（神秘、謎、なぞ）、未知、未開（未開発）、すごい（高度な文明・文化、発達、先進的、超）、古代（太古、昔、古い、最古）、高い（—ところ、高地、高山）、大きい（巨大）、変な（—像、—人形、—もの）

りは木が鬱蒼と茂った「ジャングル・密林・森」(34 件)地域が想起されがちである。また、マチュピチュとの関連でマヤは高いところに発達した文明であるというイメージが極めて強いが、これはこの「秘境」イメージによっても支えられているはずだ。

「秘境」は文化的なコンテクストにおいて「未開」の「先住民」と容易に結びつきやすい。そうした「未開の先住民」イメージを通じて黒人(6 件)やアフリカ(2 件)とも結びついていくものと思われる。これは、アンケート写真 12 番の南米先住民がマサイ族(11 名)、アフリカ(7 名)と勘違いされたことによっても裏付けられる。こうした「秘境」というイメージを介して、マヤがアフリカの部族などと結びついていくのは、「世界ふしぎ発見！」のような世界の諸文化・諸民族を「未開」「秘境」「謎」といったコンテクストで語るマスメディアの影響を受けたことを示すものと言って構わないだろう。

観念的なイメージとしての「未開」は自然の「未開」としての密林（ジャングル）をも内包するはずである。その意味で設問 9 のティカル遺跡をマヤとみなした者の中には、この「未開」イメージを通じてマヤであると判断した者もかなり含まれるはずである。実際、ティカル遺跡の写真の下にマヤの遺跡と記入したのはわずかに 20 名であった。

また、設問 9 においてマヤであると誤認される割合の多かったものにインドネシアの影絵がある。名称欄に記入された主な間違いは、全記入者 99 名中、エジプトが 8 名、マヤが 3 名であった。その他にサイパン人(1)、イスラム(1)、アラビア(1)、アステカ(1)、インカ文明(1)などがあった。これら多様な名称（地名）はおそらく、「マヤ」というアンケートのコンテクストにおいて、それが異文化社会のものであることを説明しようとしたものだろう。すなわち、何であるか分からないがゆえに、自分が知っている異文化情報の中から、イメージとして最も近いものを適用したのだと思われる。従って、大学生や高校生を含めて 27.7%の人が、インドネシアの影絵をマヤと判断したのは、それが彼らにとってエキゾチックであるがゆえに、不思議なものを表わす記号としての「マヤ」を暫定的に当てはめたためだと思われる。

設問 8 でマヤに関連して思い浮かべるものとして記入されたものは、現代日本人がそうした不思議でエキゾチックなものと見なすもののリストであると言えだろう。つまり、アンケート回答者は単にマヤの文明的特徴を記載したのではなく、マヤを一つの異文化カテゴリーとみなし、その異文化カテゴリーに合致する特徴をも列記したのである。

3. 考察

以上に示したアンケート調査の集計結果を、日本に流通するマヤ・オリエンタリズムへの被曝という観点から検討してみよう。すなわち、マヤに関して何の情報も持たない子供たちが教育やテレビ番組など様々なメディアを介して日本に流通するマヤ情報に接することで、彼らはどのようマヤ・イメージを獲得ないしは形成していくのか、あるいは植え付けられ再生産するようになるのか。そのプロセスを高校生、大学生、放送大学生という、マヤ・オリエンタリズムからの被曝の度合いが次第に増していく三つの標本集団におけるマヤ識別度を今一度比較検討してみよう。

地名に関してマヤの識別度が主として学校の歴史教育によって向上していくことはすでに見たとおりである。ところが、情報量の増加によってマヤ地域の同定率は向上するのに対し、アンデス地

域をマヤ地域と誤認する度合いはほとんど変化しない。これは一つには、マヤ文明が日本の歴史教育において新大陸文明としてアンデス文明（特にインカ帝国）と必ずセットで登場するため、マヤとインカ（アンデス）が明確に区別しにくいことによるものだと考えられる[5)]。マヤと言えばインカ（アンデス）、インカと言えばマヤというある意味での公式（以下、マヤ＝インカ思考回路と呼ぶ）が学校教育によって日本社会に刷り込まれているのだと言えよう。しかも、それは思考というよりはむしろ身体化された反射的な行為として広く実践されている。その意味で、マヤ＝インカ思考回路は社会的に獲得された性向の総体を指してブルデューが名付けたハビトゥスと呼ぶに値するものだろう。そうしたハビトゥスに従って、日本人は無意識の内にアンデス地域をマヤと結びつけてしまうのではないだろうか。たとえば、放送大学生のようにマヤに関して正確な情報を多く持っている場合であっても、そうしたハビトゥス化された思考パターンに従って、アンデス地域をもマヤと関連があるとついつい考えてしまうのである。

だとすれば、情報源別のマヤ地域識別度を高校生・大学生・放送大学生毎にグラフ化した図 2～4 は、単にマヤに関して獲得する情報量が増加することによってマヤの同定率が高まることを示すだけでなく、そうしたハビトゥスの発動によってマヤに関する特異なイメージが形成されていく様子を示すものだといえよう。すなわち、高校生・大学生・放送大学生の「マヤ」への被曝量を時系列に配列した場合、「マヤ」に関する歴史教育やテレビ・メディア等への被曝量が少ない高校生以前においては、マヤがどこに存在するものであるかはほとんど識別できていない。ところが、教科書や授業、さらにはその他のメディアへのアクセスによって「マヤ」に関する知識ないしはイメージがマヤ＝インカ思考回路を通じて形成され始める。大学生では誤ったマヤ情報が、おそらくアクセスする情報量の増大に伴って次第に是正されていく。放送大学生のようにさらにマヤに関する情報を積極的に入手するようになれば、マヤ地域とアンデス地域に対する地域識別度は逆転していくことになるが、そうした例は極めて例外的であるだろう。むしろ、通常の日本人はマヤ＝インカという思考を保持したまま、「マヤ」情報を拡大ないしは精緻化させていくのである。

なお、マヤ＝インカ思考回路はその延長物としての「アマゾン」イメージを伴っていることにも注意が必要である。マヤに関する情報へのアクセスが増えていくにつれて、アフリカやエジプト、インダスなど旧大陸の地名とマヤとの間違った連関が修正されていくのに対し、アマゾンやブラジルに関しての間違いは劇的には修正されない。これはアマゾンが南アメリカ大陸にあってアンデス地域と隣接しているために区別が難しいことに加え、「未開」や「秘境」といったイメージと結びついていること、また日本における「マヤ」がそうした「未開」や「秘境」イメージを喚起するものであることによるものと思われる。

図 2 に明らかなように、マヤ文明に関して学校で教わっていない高校生であっても、アンデス地域をマヤと結びつける傾向がある。しかも、その誤認率は他の地名の場合よりもはるかに高い数値を示している。このことは彼らがすでに何らかの形で「マヤ」情報に被曝したことによって、マヤ＝インカ思考回路を獲得していることを示すものである。さらに、「マヤ」情報への被曝量が増大する大学生では、学校教育およびテレビ等のメディアからのマヤ情報を得た記憶がある人とない人との間でのマヤ＝インカ思考回路発動の差は縮小していく。すなわち、「マヤ」情報にアクセスしたという記憶ないしは意識がなくとも、アンデス地域をマヤと誤認する割合は次第に高まっていくのである（図 3）。放送大学生に至っては、マヤに関して何らかの情報を得たか否かにかかわらず、

半数もの人がアンデス地域をマヤに関連すると考えている（図 4）。これらの数値は日本社会にはマヤ＝インカ思考回路によって形成された「マヤ」情報が様々な形で広範に存在し、日本人は知らないうちにそうした「マヤ」情報すなわち日本のマヤ・オリエンタリズムに被曝していることを示すものである。

おわりに

アンケートではマヤに関して高校レベルの世界史教育を受けていない「高校生」、その世界史教育を受けた者の多い一般の「大学生」、マヤに特別の関心を持っている「放送大学生」を対象として、各標本集団間でのマヤ識別度の違いを見ることから日本において流通するマヤ・イメージがどのようなものであるか、またそれはどのように形成されるのかについて検討してきた。マヤに関する情報へのアクセスおよび無意識のうちの被曝量は「高校生」「大学生」「放送大学生」の順番で増加するはずなので、これらの 3 つの標本集団はマヤ・イメージの獲得あるいは形成の時系列に位置付けることができる。そうした観点から見れば、「高校生」のレベルではマヤに関して具体的なイメージがまだ存在しないのに対して、「大学生」レベルになると、マヤとインカとが混在したマヤ・イメージが形成されていく。これは一つには、学校の歴史教育においてマヤとインカが同一のコンテクストで取り上げられることに起因しているはずである。

しかし、そうした世界史教育を受けていない「高校生」であってもインカをマヤと混同する者は多いことから、マヤとインカを同一視する思考様式はテレビ番組など学校教育以外の場にも数多く存在すると考えられる。そうしたメディアに対する自動的かつ半強制的な接触を通じて日本人はマヤ＝インカ複合としてのマヤ・イメージを、単なる知識としてではなく、思考を自動化するハビトゥスとして獲得していくものと考えられる。なぜなら、マヤに関する情報量が増えることによって誤認は次第に修正されていくが、インカ（アンデス関連情報）だけはマヤと誤認される場合が多いからである。

いずれにせよ、アンケートの設問 8 における記入例（表 8）から明らかなように、「マヤ」は古代文明に関する言説の中で「秘境」や「未開」といったイメージを媒介としてアンデス文明以外の様々な異文化・異民族に関する語りへと接続する傾向にある。こうした思考様式は、1970 年代末以降テレビ番組に登場するようになった、世界の「秘境」に存在する様々な「未開」の文化や文明を紹介する娯楽教養番組によっても醸成されてきたはずである。たとえば、TBS 系列放映の「世界ふしぎ発見！」は「ふしぎ（＝謎解き）」という仕掛けを通して「秘境」や「未開」の地を駆けめぐる典型的な番組である。この番組あるいは同様の仕掛けをもった番組を見た人が、イメージだけで思考を巡らした時、マヤとインカ、あるいはエジプトをさえ混同したとしても決して不思議ではないだろう。

その意味での日本におけるマヤ・オリエンタリズムは、西洋が独自に発展させたオリエンタリズムとさして変わるところはない。たとえば、カスタニェダ[1996]は、新大陸の発見以降西洋が継続させた、他者としての「東洋」に対する修辞の具体的な例としてカニバリズムや野蛮、神秘といった言葉を挙げている。これらは奇しくも日本のマスメディアが描く「マヤ」イメージと同じである[6)]。だが、それは日本に流通するマヤ情報が西洋から輸入されたことだけに起因するわけではない。

むしろ、マヤ・イメージの消費あるいはその再生産において、日本を中心に世界史を語る歴史叙述（その原形は中学校の歴史教科書に見られる。高校の歴史教育はその発展形に過ぎない）によって形成されたマヤ＝インカ思考ハビトゥスが作動していることを忘れてはならない。近年、学習指導要綱の改訂によって、大航海時代における西洋への接続という構図に限定されない新大陸文明の歴史記述も可能となっている。しかし、今日日本において、流通させるべき商品としての「マヤ」を製造しているのはいまだに、古い歴史叙述スタイルの中でマヤ＝インカ思考回路を植えつけられたかつての高校生たちなのである。

青山が主張するように、日本の「歪んだ」マヤ・イメージを修正するためには、マヤ・オリエンタリズムを脱構築しなければならない。そのためには「より現実的でより客観的な古代マヤ文明観を学び知らしめること」[青山 2001: 21]が必要であり、現場で働くマヤ考古学者は「誤った言説を公の場で訂正したり、マヤ考古学における新しい知見を専門研究者以外に広く知らしめる努力」[*Ibid.*]をするなど、日本におけるマヤ情報の流通にある程度責任を負わねばならないということになる。だが、本稿で見てきたように、そうした事実の修正だけでは必ずしも「マヤ」イメージから「インカ」という要素を取り除くことはできない。日本人はマヤという情報に接したとき、マヤ＝インカ思考回路を通じて、マヤだけでなく、その背後にインカ、さらにはエジプトあるいはその他の異文化をも見ようとするのである。

仮に、現代の日本がその成員たる「個人［は］文化要素を選択し自己成型しなければならない」ような社会だとしたら[太田 1993: 400]、マヤ研究者がなすべきことは「歪んだ」マヤ情報を修正するというよりは、むしろ選択肢の一つとしてのより「正しい」マヤ情報をより多く提供していくことなのだと言えよう。「より現実的でより客観的な古代マヤ文明観を学び知らしめる」ことはその一つに過ぎない。なんとなれば、現在のマヤ研究者が「正しい」とみなしたものであっても、それはその時点での社会的評価が刻印されたものであり、その判断の是非は依然として留保すべきものである[7)]。また、仮に「歪んだ」マヤ情報であっても、それが現実のマヤについて知ろうとする一つの積極的な動機付けになっていることもある。我々マヤ研究者自身の場合がそのいい見本だろう[cf. 中村 1999: 272]。だとすれば、そうした動機付けを持った人がより「正しい」マヤの情報にたどり着けるような機会と道筋を、「支配的な言説の内部で通用することばで」[太田 1993: 395]数多く提供していくことこそが、マヤ・オリエンタリズムを脱構築するために必要な作業なのだと言えよう。言い換えれば、マヤ研究者は遺跡の発掘や碑文の解読作業を通して、単に古代マヤの歴史や社会、文化に関する「謎」の解明を行うだけでなく、そうした脱構築に必要な言葉を我々の社会の内部から発掘する使命をも帯びているのである。正すべきは「歪んだ」マヤ・イメージなのではなく、むしろマヤ・イメージが消費（教育・研究を含む）される形態であり、そのコンテクストであるはずだ[8)]。

註

1) 調査実施者は筆者以外に、桜井三枝子（大阪経済大学）、初谷譲次（天理大学）、鈴木紀（千葉大学）、杓谷茂樹（中部大学）、多々良穣（東北学院榴ケ岡高等学校教諭）の各氏である。アンケート回答数は東北学院榴ケ岡高等学校（仙台市）の生徒 727 人、神戸市外国語大学、大阪経済大学、大阪学院大学、同志社大学、天理大学、中部大学、東海女子大学、南山大学、

東京大学、千葉大学、福島大学、東北大学、宮城学院女子大学の大学生合計 1,502 人、また放送大学の学生 80 人分である。学年別では高校 1 年生 494 人、高校 2 年生 229 人、また大学生（放送大学生を除く）はアンケート実施時の学年で 1 年生 1,338 人、2 年生 505 人、3 年生 287 人、4 年生以上 74 人であった。放送大学生の平均年齢は男女ともに 51 才であった。

なお、同調査は平成 14 年～16 年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)による『マヤ・イメージの形成と消費に関する人類学および歴史学的研究』の一部として実施されたものであり、本稿は同研究成果報告書に掲載した拙稿(2005)「日本におけるマヤ・イメージの実態」を改稿したものである。また、本稿の執筆に当たり、東北ラテンアメリカ考古人類学研究会において坂井正人、多々良穣、坂井妙子、伊豆田亮爾の各氏より貴重なコメントを頂いた。この場を借りて改めてお礼を申し上げたい。

2) 中学校の歴史教科書ですでにマヤに関する記述がなされている場合もある。たとえば、筆者が確認した昭和 29 年から平成 14 年までの中学校歴史教科書 78 冊のうち、19 冊はマヤに関して言及している。また、本文中での言及はなくともマヤの遺跡の写真を掲載したり、地図上にマヤ文明を示したりしたものも 6 件あった。

3) マヤ・オリエンタリズムは必ずしもマスメディアだけが作り出すものではなく、消費者の欲望を少なからず反映したものであるという点で、被曝という言葉はマヤ・イメージ消費の一面を捉えたものでしかない。しかし、高校生や大学生が大人（日本社会）のマヤ・オリエンタリズムの下で作られたマヤ・イメージを半強制的に消費させられていることは事実である。つまり、彼らも日本におけるマヤ・オリエンタリズムを再生産する（＝マヤ・イメージを消費する）主体の一部を構成してはいるが、その再生産のプロセスにおいて彼らはまずはすでに流通しているマヤ・オリエンタリズムを参照する。特に、「マヤ」に関する情報を元々持たない者が、教育を含む様々なメディアを通じて「マヤ」情報への接触を余儀なくされているという点では、彼らとマヤ・オリエンタリズムとの関係は被曝という言葉で表現することが適切であると筆者は考える。彼らがマヤ・オリエンタリズムの再生産者となるのは、被曝したそのマヤ・オリエンタリズムを彼らが主体的に消費・流用していくプロセスにおいてであると言えよう。ただ、そうした主体的消費は必ずしも既存のマヤ・オリエンタリズムを批判的に解釈・流用したものでない限り、既存のマヤ・オリエンタリズムの再生産でしかない。だとすれば、日本において流通するマヤ・オリエンタリズムはピエール・ブルデューがいうところの、構造化する構造としてのハビトゥスとして捉えるべきである。

4) 使用した写真イメージは次の通りである。01.ティカル遺跡、02.エジプトのピラミッド、03.マチュピチュ遺跡、04.イースター島モアイ像、05.テオティワカン遺跡、06.ナスカの地上絵、07.パレンケの翡翠の仮面、08.インドネシアの影絵、09.マヤ文字の石碑、10.古代エジプト王后、11.サパティスタ女性、12.南米先住民女性。ただし、2002 年度版では、01 番のティカル遺跡の代わりにアンコールワット遺跡、05 番のテオティワカン遺跡の代わりにストーンヘンジ遺跡、09 番のマヤ文字の碑文の代わりにくさび形文字、12 番の南米先住民の代わりに北米先住民男性を用いた。2002 年度版のアンケート回答数は 907 件、2003 年度版のアンケート回答数は 1,402 件である。なお、高校生及び放送大学生に対する調査では 2003 年度版を用いた。

5) 日本の歴史教科書において新大陸文明は、大航海時代の一エピソードとして登場するため、

マヤやインカを明確に区別する必要はなかった。むしろ、西洋が新大陸の住民を「インディオ」という言葉で総称したのと同じように、マヤやインカは「新大陸の古代文明」として一括しておく方が都合が良かった。それゆえ、マヤやインカに関する説明は脚注という狭いスペースに押し込まれることが多かったのである。

6) 近年に至って、古代文明は日本人の異文化消費欲望を満たしてくれる装置のひとつであるに留まらず、むしろ、そうしたオリエンタリズム的願望を隠蔽するための装置としても利用されるようになってきた。たとえば、2005 年 3 月から NHK が「探検ロマン世界遺産」という番組を開始した。この番組ではその成立の神秘について解説する一方で、その神秘そのものをロマンという言葉で神話化しようとする。つまり、日本人のオリエンタリズム意識に根ざした異文化消費願望を、地球あるいはそこに暮らした人々が生み出した「現実」としてのロマンに投射することで、日本社会に流通するオリエンタリズムの痕跡を消去しようとする。そもそも世界遺産の保存という近年の試み自体、西洋がオリエンタリズムを実践し続けるための新たな受け皿に他ならないのではないだろうか。

7) たとえば、青山の言う現実的で客観的な古代マヤ文明観とは、かつての欧米マヤ学者のロマンチックで主観的な古代マヤ文明観に基づいた研究に対して、近年のマヤ考古学はより客観的な手法を用いるようになってきたことを指している。しかし、そうした客観的な研究によって新たに作られた、戦争に明け暮れた血なまぐさいイメージを伴うマヤ文明観は現代のマヤの人びとのイメージを損なうものとしてマヤ運動家たちからは批判されている。

8) お二人の査読者より、本稿で用いた被曝という言葉にはネガティブなイメージがあるので、不適切ではないかというコメントを頂いた。ある意味で「無意識的な接触」で事足りる。しかし、オリエンタリズムは欲望の構造であると同時に、欲望を生み出す構造化する構造としてのハビトゥスでもある。そのハビトゥスが発動している社会においてその成員はその影響から逃れることはできない。オリエンタリズムが否定的意味を帯びたものである限りにおいて、それとの接触はネガティブなものとならざるを得ない。また、我々研究者とてそのオリエンタリズムという欲望装置から決して自由ではありえない。研究成果の利用は時として我々研究者の想定を超えたものであり、その社会的な利用まで責任を負うのは荷が重すぎるかもしれない。だが、消費財である研究成果は必ずや社会に吸い上げられ、オリエンタリズムに利用される。研究が「謎」の解明であれば、なおさらのことである。マヤ研究者個々人がマヤ研究の功罪、すなわちマヤ・オリエンタリズムへの関わりを改めて問い直すべきであるという自戒の意味も込めて、本稿では敢えて被曝という言葉を使用させて頂いた。

参考文献

青山和夫

2001 「古代マヤ文明観の変遷とその現代的位置付け」『人文学科論集』（茨城大学人文学部紀要）30: 1-28.

ボーデ、クロード／シドニー・ピカソ

1991 『マヤ文明—失われた都市を求めて』（落合一泰監修）創元社. ブルデュ、ピエール

1988 『実践感覚 1』今村仁司・港道隆共訳、みすず書房.

Castañeda, Quetzil E.

1996 *In the Museum of Maya Culture: Touring Chichén Itzá.* Minneapolis: University of Minnesota Press.

ド・セルトー、ミシェル

1987 [1980] 『日常的実践のポイエティーク』山田登世子訳、国文社(Michel de Cerceau, Art de Faire. Paris: Union Général d'Editions.).

Evans, R. Tripp

2004 *Romancing the Maya: Mexican Antiquity in the American Imagination, 1820-1915.* Austin, University of Texas Press.

Fash, William L.

1994 "Changing Perspectives on Maya Civilization." *Annual Review of Anthropology* 23: 181-208.

中村誠一

1999 『マヤ文明はなぜ滅んだか？—よみがえる古代都市興亡の歴史』ニュートンプレス.

太田好信

1993 「文化の客体化—観光をとおした文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』57(4): 383-410.

サブロフ、ジェレミー

1998 『新しい考古学と古代マヤ文明』（青山和夫訳）新評論.

田辺繁治

2003 『生き方の人類学—実践とは何か』講談社.

吉田栄人

2005 『マヤ・イメージの形成と消費に関する人類学および歴史学的研究』平成 14 年～16 年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書.

付録資料　マヤ・イメージに関するアンケート用紙

設問１　高校までの授業で使用した教科書に、古代マヤ文明、現代のマヤ民族のいずれかに関する記述はありましたか？

01．はい　　02．いいえ　　03．覚えていない

設問２　高校までの授業で、古代マヤ文明、現代のマヤ民族のいずれかに関して実際に何かを教わりましたか？

01．はい　　02．いいえ　　03．覚えていない

設問３　高校までの授業以外で、古代マヤ文明、現代のマヤ民族のいずれかに関して、耳にしたり、文字や映像などで見たことはありますか？

01．はい　　02．いいえ

設問３で「はい」と答えられた方は設問４へ，また「いいえ」と答えられた方は設問５へお進み下さい。

設問４　高校までの授業以外で、マヤに関する知識や情報は、何を通じて得られましたか？　該当する番号すべてに○印を付けてください。また、情報源をご記憶の場合にはその名称を具体的に括弧内にご記入下さい。

01．テレビ番組　〔……〕

02．漫画本　〔……〕

03．雑誌（漫画本を除く　）　〔……〕

04．教科書・漫画本・雑誌以外の図書　〔……〕

05．コンピュータ・ゲーム　〔……〕

06．映画　〔……〕

07．その他　〔……〕

設問５　マヤ文化（文明）に関心はありますか。

01．大いにある　　02．少しならある　　03．あまりない　　04．全くない

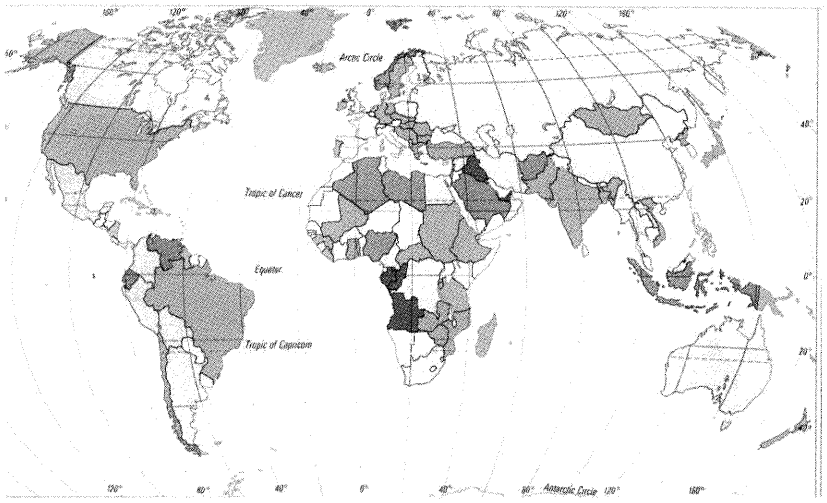
付録資料　マヤ・イメージに関するアンケート用紙

次の設問６～９は、上記設問１～３において一度でも「はい」か「覚えていない」と答えられた方にお尋ねするものです。すべてに「いいえ」を選択された方は設問10へお進み下さい。

設問６　マヤ文化（文明）地域は次にあげる国あるいは地域のうちどこにありますか。該当するものは〔　〕内の「マヤ」を、また該当しないものは「非マヤ」を○で囲んでください。

01. ペルー	〔マヤ／非マヤ〕	08. メキシコ	〔マヤ／非マヤ〕
02. ブラジル	〔マヤ／非マヤ〕	09. アフリカ	〔マヤ／非マヤ〕
03. グアテマラ	〔マヤ／非マヤ〕	10. ジャマイカ	〔マヤ／非マヤ〕
04. カリブ海	〔マヤ／非マヤ〕	11. アマゾン河	〔マヤ／非マヤ〕
05. インダス	〔マヤ／非マヤ〕	12. エル・ドラド	〔マヤ／非マヤ〕
06. メソポタミア	〔マヤ／非マヤ〕	13. エジプト	〔マヤ／非マヤ〕
07. メソアメリカ	〔マヤ／非マヤ〕	14. アンデス	〔マヤ／非マヤ〕

設問７　マヤ文化（文明）に該当すると思われる、おおよその場所を次の地図に線で囲って図示してください。



設問８　マヤ文化（文明）と聞いて思い浮かべるものあるいは言葉をいくつでも自由にご記入下さい。

……

……

付録資料　マヤ・イメージに関するアンケート用紙

設問９　次の写真のうち、マヤ文化（文明）に関連すると思われる場合には〔　〕内の「マヤ」を、またマヤではないと思われる場合には「非マヤ」に○印を付けて下さい。なお、ご存知であれば、各写真がどの文化（文明）名に属すのか、あるいはその具体的な名称を写真の下の【　】内にご記入下さい。

01.〔マヤ／非マヤ〕

【　　】

02.〔マヤ／非マヤ〕

【　　】

03.〔マヤ／非マヤ〕

【　　】

04.〔マヤ／非マヤ〕

【　　】

05.〔マヤ／非マヤ〕

【　　】

06.〔マヤ／非マヤ〕

【　　】

07.〔マヤ／非マヤ〕

【　　】

08.〔マヤ／非マヤ〕

【　　】

09.〔マヤ／非マヤ〕

【　　】

10.〔マヤ／非マヤ〕

【　　】

11.〔マヤ／非マヤ〕

【　　】

12.〔マヤ／非マヤ〕

【　　】

設問１０　回答者全員にお尋ねします。次の各項目をご記入下さい

性別	01. 男性	02. 女性			
学年	01. 1年	02. 2年	03. 3年	04. 4年	05. 大学院　06. 社会人
所属	01. 文系（学部名：　　）	02. 理系（学部名：　　）	03. 高校		

◎設問は以上です。ご回答ありがとうございました。

The habitual structure of consuming Mayan images in Japan: A study on the questionnaire survey to high school students, university students, and the Air University students.

Shigeto Yoshida
(Graduate School of International Cultural Studies, Tohoku University)

Key words: Maya, orientalism, images, consumption, habitus

This article analyzes the Mayan images consumed in Japan, using the data of questionnaire survey to high school students, university students, and the Air University students, and also discusses the habitual structure of being recreated those images in Japan. The used data will be categorized into three groups from the point of view of the degree of consuming Mayan images circulated in Japan, which is explained in terms of the exposure, not only in active ways but also in unconscious modes, to its effects.

The questionnaire data show that the Japanese acquire an image in which the Mayan civilization and the Andean civilization are confused, by way of receiving an ethnocentric view on the world history in the high school education.

However, those Japanese who have not received high school program on the world history, also tend to hold the same Mayan-Incan complexes. This suggests that the Mayan discourses based on the Mayan-Incan complexes are circulated in Japan in broad forms such as TV programs, journals, computer games, etc., to which we the Japanese are exposed in a daily life.

The data also indicate that the Japanese acquire this Mayan-Incan complexes as a habitus (structuring habit). As a result, many of the Japanese cannot distinguish clearly the Maya from the Inca, even after getting more accurate information on the Mayan civilization. This habitual structure explains why the Japanese take some foreign cultures, specially archaic civilizations, for Mayan. The Japanese are forced to consume foreign cultures in this habitual structure, which suppresses their recognition capability of the others, and in its exchange satisfies, even amplifies, the desires for consuming strange cultures.

原稿受領日　2006 年 03 月 05 日
採択決定日　2006 年 05 月 18 日